

---

**研 究**

---

**大韓帝国における講道館柔道の移入過程に関する研究  
—内田良平と青柳喜平の活動に着目して—****A Study on the Introduction of Kodokan Judo to the Korean Empire:  
With Emphasis on the Activities of Ryohei Uchida and Kihei Aoyagi**

朴 鍾鎭

Jong Jin Park

**Abstract**

This study examined the introduction of Kodokan Judo from 1894 (27<sup>th</sup> year of Meiji) - when Ryohei Uchida entered the Korean Empire after learning Kodokan Judo in Japan - to 1939 (13<sup>th</sup> year of Showa), the last year of the Japanese Colonization of Korea.

Uchida has been known as someone who played a critical role in the introduction of Kodokan Judo to the Korean Empire. Uchida obtained first-dan in Kodokan Judo in 1894 (27<sup>th</sup> year of Meiji) and returned to his hometown, Fukuoka, to organize a group called Tenyurai with Japanese martial art performers in order to participate in the Korean Empire's Donghak Revolution. Kodokan Judo was founded in the Korean Empire in 1906 (39<sup>th</sup> year of Meiji) when Uchida brought it from Japan. He was related to a political organization called Iljinhoe of the Korean Empire, and established the Uchida Kodokan Judo Studio at a Japanese factory in 1906 (39<sup>th</sup> year of Meiji) in Myongchi-jeon (currently Myeong-dong in Seoul) in the Korean Empire. Then, he established Kokuryukai - an extreme rightwing political organization- to assist Japan's invasion of China, and three instructors - Ryohei Uchida, Tadashi Shika, and Kihei Aoyagi - taught in this studio. He was more open to political activities than to Judo practice. Uchida's study area was about a thirty-mat room and about 20-30 people began practicing there at first. As a result of this study, I found that Ryohei Uchida introduced had Kodokan Judo to the Korean Empire. However, Kodokan Judo was introduced in the process of colonization of the Korean Empire rather than having spread purely.

*Key words; Korean Empire, Kodokan Judo, Ryohei Uchida, Kihei Aoyagi*

## 1. 序

大韓帝国における柔道の発展の背景として、戦前の日本による36年間（1910年から1945年まで）の植民地統治時代を無視することはできない。この時代に日本から講道館柔道が大韓帝国<sup>1)</sup>にもたらされたのだが、その移入過程について検討することは現在の大韓民国柔道を語る上で重要なことであると思われる。

これまでの大韓帝国時代の柔道史において、講道館柔道の普及段階に注目した主な研究は以下の6つの文献である。

- ①李學來：『韓國柔道發達史』，保景文化社，1990。  
(이학래:『한국유도발달사』，보경문화사，1990.)
- ②工藤雷介：『秘録日本柔道』，東京スポーツ新聞社，1975。
- ③西尾陽太郎：『秘録日本柔道』，葦書房有限会社，1978。
- ④西尾達雄著：『体育・スポーツにみる戦争責任』，樹花社，1995。
- ⑤三田柔友會：『慶応義塾柔道部史』，山本刷所，1933。
- ⑥小野勝敏：『朝鮮柔道史の研究の序説』，「岐阜経済大学論集」，第26巻第1号，26，1992。

まず、李學來の『韓国柔道発達史』では、内田良平が大韓帝国に入国した後の講道館柔道の普及について言及しているが、その活動の本来の目的については触れてはいない。工藤雷介の『秘録日本柔道』と西尾陽太郎の『秘録日本柔道』では、内田良平の生涯について記されているが、大韓帝国に講道館柔道を普及した行動の詳細については言及されていない。

西尾達雄の『体育・スポーツにみる戦争責任』は、植民地政策下にあった大韓帝国の体育・スポーツについて検討がなされたものである。その中では植民地政策の変化と体育の関係については述べられているものの、当時行われていた講道館柔道の大韓帝国への移入過程については触れていない。

三田柔友會の『慶応義塾柔道部史』は、日本における内田良平による講道館柔道の学生教育の詳細について触れているが、大韓帝国に入国した後の講道館柔道についての分析はなされていない。また、小野勝敏の『朝鮮柔道史の研究の序説』でも、青柳喜平と内田良平の人物像について述べているが、内田良平の大韓帝国における活動の詳細については触れていない。

以上の先行研究を検討した結果、大韓帝国へ講道館柔道を移入させた人物として内田良平と青柳喜平の2名を挙げることができる。しかしながら、2名の人物とその活動の詳細に焦点を当てることによって講道館柔道の移入段階での各々の役割については、いずれの研究においても明らかにされていない。

そこで、本研究は1894（明治27）年から、日本帝国末期の最後の年となる1938（昭和13）年までの大韓帝国における講道館柔道の移入に関わった内田良平と青柳喜平に着目して、各々の活動の詳細と役割について明らかにすることを目的とした。

## 2. 大韓帝国への講道館柔道伝達に関する諸説

大韓帝国に最初に講道館柔道を伝達した人物と時期については、青柳喜平説と内田良平説の2説が挙げられる。

### 2.1 青柳喜平説

青柳喜平については、1908（明治41）年11月7日の「京城新聞」に、次のような記述がみられる<sup>9)</sup>。

柔道教師青柳喜平氏嘗て京城に於て柔道の師範をなしたる。青柳喜平氏は今回韓国13道を跋涉し京城に來られ大和町1丁目神崎福次郎氏方へ滞在せらる。

この記事には、青柳喜平が、大韓帝国13道を

巡回した目的や状況等についての具体的な言及はされていない。しかし、この記述により、1908（明治41）11月以前に、青柳喜平が京城で柔道の師範をしていたことは明かである。

李瑄根（이선근）の『大韓国史』には、以下のような記述がある<sup>20)</sup>。

柔道は1907年日本人である青柳によってわが国に紹介され、一番最初に公開されたのは、1908年3月に内閣園遊会主催のもとに、秘苑で開催された韓日両国警察柔道競技であった。

また、申元永（신원영）編『韓国体育百年史』<sup>23)</sup> および『大韓体育会史』<sup>8)</sup> においても、青柳説については、『大韓国史』におけるものとはほぼ同じ内容となっている。これらの文献以外ではソウル大学名誉教授羅絢成（나현성）も「（柔道は一筆者）わが国には、光武年代（1897年～1907年）に日本人青柳喜平により伝来した」<sup>17)</sup> と述べており、韓国教員大学の林榮茂（임무영）<sup>22)</sup>、東亜大学の鄭三鉉（정삼현）<sup>24)</sup> もほぼ同様の見解であるとされる。

このように上記の研究では、青柳喜平を大韓帝国へ柔道を紹介した最初の人物とし、その時期を1907（明治40）年としている。しかし、いずれの研究においても、その論拠をについて必ずしも明確ではない。また、大韓帝国で最初に公開された柔道の競技については、1908（明治41）年3月28日に秘苑で開催された韓日両国の警察官によるデモンストラーションとしている。但し、青柳喜平がこの公開柔道競技に関与したかどうかについては、定かではない。

では、この青柳喜平はいかなる柔道歴を有する人物なのであろうか。青柳喜平の経歴については、以下の通りである<sup>7)</sup>。

明治4（1871）年10月18日に福岡市で生まれる。同18（1885）年8月14日、双

水執流舌間道場に入門。同28（1895）年2月14日、24歳で免許皆伝となり、双水執流14代を断承。同36（1903）年7月2日、渡朝し林権助公使の依頼により道場を開設<sup>22)</sup>。同38（1905）年、大日本武徳会乱取刑制定委員会の委員に就任。同42（1909）年8月、京都で開かれた大日本武徳会の第11回青年大演武会の柔術之部の審判を務める<sup>23)</sup>。大正15（1926）年5月7日、柔道範士となる。昭和4（1929）年8月25日、59歳で死去。

青柳喜平は、双水執流の第14代の家元であり、1906（明治39）年7月24日、京都の大日本武徳会本部で開催された「武徳流柔術新形制定委員会」に参加した10流派20名のうち、双水執流の代表者として出席した著名な柔術家である<sup>15)</sup>。「表1」は武徳流柔術新形制定委員会に出席した流派、人数、氏名を示したものである<sup>16)</sup>。

表1 「武徳流柔術新形制定委員会」出席の流派

流 派	参加人員	氏 名
講道館流	6	嘉納治五郎、山下義韶、磯貝一、横山作次郎、永岡秀一、佐藤法賢
竹内流	3	竹野鹿太郎、今井行太郎、大島彦三郎
揚心流	3	平塚葛太、戸塚英美、片山高義
関口流	2	関口柔心、津水茂吉
下遷流	1	田辺又右衛門
三浦流	1	稲津政光
扱心流	1	江口弥三
西天流	1	星野九門
竹内三統流	1	矢野広次
双水執流	1	青柳喜平

表1からも、青柳喜平の双水執流が当時の柔術界を代表する流派の一つであることが伺える。また、青柳喜平はその流派の師範としての実力も兼ね備えていたと考えられ、従って大韓帝国での柔術の紹介・指導も可能であったと推察される。

## 2.2 内田良平説

次に、講道館柔道の導入に関する内田良平説について検討する。内田良平は1892（明治25）年6月に講道館へ入門した後に、時折郷里・福岡へ帰省をしては、彼が道場主である天真館の館員に指導をする傍ら、当時市内にあった他の道場との試合を行っていた。その試合の相手に、双水執流の青柳喜平がおり最初は互角の勝負であったが、1894（明治27）年になると、その実力において青柳喜平はもはや内田良平に齒が立たなかった、と言われていた<sup>12)</sup>。

このように両者は、同郷ということや、若い頃に勝負をした経験もあり、渡韓する以前から近懇の間柄であったと推察される。また、1927（昭和2）年2月2日の『京城日報』に掲載された阿部文雄<sup>6)</sup>の「京城柔道発達史（二）」において以下の記述が見られる<sup>10)</sup>。

明治39年、明治町（現在ソウルのミョンドン）の或る日本建の工場を利用して道場を設けた。その広さは三十畳ばかりで、始めの頃は二十三人の稽古人であったといふことである。教師としては内田良平の外巡査に初段志賀矩氏あり実業家青柳某氏（他流）もまたあづかった（中略）京城に講道館柔道の道場を創始した月桂冠は誰の手に落ちるかといえ、これは当時総監府囑託五段内田良平氏に帰せざるを得ない。（下略）

ここでの「実業家青柳某氏」とは、青柳喜平のことであり、青柳喜平が明治1906（明治39）年に内田良平の明治町道場経営・指導の援助をしたことがわかる。

また、李學来（이학래）は、大韓帝国への講道館柔道の最初の伝達者について「1906年、日本人内田良平により伝来」<sup>19)</sup>と述べている。他にも、李洪鍾<sup>21)</sup>が、この内田良平説を支持している。以上のように、内田良平には、大韓帝国で最初に講道館柔道の道場を創始した名誉が与えられることになるのだが、上記文中では必ずしも、大韓帝国へ柔道を最初に伝達した人物たる位置付けがなされている訳ではない。

## 3. 内田良平の政治活動

内田良平は、親日御用団体たる一進会<sup>2)</sup>の顧問として、1910（明治43）年の韓日併合を推進した人物でもある。内田良平は、純粋な柔道家というよりも、政治的活動家としての側面を内在した人物と言ってもよいであろう。

内田良平は、柔道を「体育・スポーツ」という概念ではなく「武道」として捉えたが、彼ほど明確に、しかも徹底したその捉え方をした者は数少ない。武道、特に柔道家として必読に価するのが、内田良平の「武道極意」である。内田良平研究会による「国土内田良平その思想と行動」では、以下のように記述されている<sup>25)</sup>。

武道極意とは、武道は飽くまでも実行を伴わなければならないものである。故に極意は人から習っただけでは役に立てない。自身の心に会得したのでなくてはならないのである。

内田良平の武勇伝は、日本に収まることなく、大韓帝国、満州、シベリアと国際的広がりをもっていた。それも単なる試合、喧嘩というものではなく、生命を賭けた、正に真剣勝負であったとされる<sup>13)</sup>。また、日清戦争の導火線となった大韓帝国における1894（明治27）年東学党の乱<sup>3)</sup>では、内田良平は20歳（玄洋社<sup>4)</sup>）で、自分より年長の同志14人と共に天佑俠を結成し、東学党の乱に関与し、自ら大韓帝国人90人の大将となり遊撃

隊を組織、奇策縦横、圧倒的に優勢な官兵（政府軍）を撃破した、と言われている<sup>14)</sup>。

東学党の勢力を恐れた大韓帝国政府は、清国から派遣された通商弁務官の袁世凱に清国の援軍を頼むが、彼はこの大韓帝国の内乱に便乗して、大韓帝国を属国化しようと企て、威海衛に待機していた3営（1500人）の軍を首都・京城に送り込むことになる<sup>18)</sup>。

このとき、大韓帝国の特命全権公使は大島圭介であったが、この危機的な事態に備えて、祖国に軍隊の派遣を要請、政府も、ようやく大島義昌の率いる9000人の混成旅団を京城に送り、やがて1896（明治29）年8月1日、日本は清国に宣戦布告し日清戦争へと突入することになるのである。

内田良平は、1894（明治27）年に講道館柔道初段を取得した後、故郷である福岡に帰り、大韓帝国で起きた東学党の乱に関わるなかで、日本の政治家と共に天佑來を組織する。また、東学党の乱に加れた李容九（イ・ヨンゲ）とともに親日的であった一進会は、内田道場を大韓帝国に設立する。さらに彼は当時の政治団体である黒龍会<sup>5)</sup>を設立するが、当時、韓国統監府の初代統監に就任した伊藤博文は、玄洋社から逃れるため、内田良平を警護にして自分の身を守ろうとしたとされる。

このように内田良平は大韓帝国に講道館柔道を移入させたが、内田道場は柔道の稽古より政治的な活動が中心であった、というのが内実である。次に示す当時の京城新聞の第167号1930年6月12日によれば、内田良平は講道館柔道の普及よりも政治活動に熱中していたことが明らかである<sup>11)</sup>。

一進会の役人らは、他人に知られないように内田良平の家（兼道場一筆者）に集まっているなことを議論し、翌日に役人らは特別会を開催し、その場で決議した内容を次のように発表した。第1、内閣総理代理李元用を退職させて一進会に復帰させる。第2、愛国志士を鎮圧すること。

一進会は常に大韓帝国の愛国運動に対応し、日

本の大韓帝国への関与に大きな役割を果たした団体である。一進会は日本軍部より多大な資金を得て、その資金で親日運動を展開し、韓日併合を推進した。このように内田良平による大韓帝国への講道館柔道の伝達は純粋なものではなく、政治活動に傾倒したものであった。

以上、大韓帝国における講道館柔道伝達に関する経緯では、内田良平及び青柳喜平説が存在するが、当時の情勢から講道館柔道の政治的移入を考慮する限りにおいては、内田良平説が有力であると言えるであろう。

#### 4. 結 論

本研究は、大韓帝国における講道館柔道の移入過程について、関連史書を基に、内田良平と青柳喜平の2人の活動に着目して検討した。その結果、講道館柔道を最初に伝達した人物は、内田良平であるという説が有力であろう。青柳喜平は、内田良平よりも3年早く1903（明治36）年に大韓帝国に道場を開設しているものの、日本における経歴によると、それは講道館柔道ではなく、双水執流の柔術を普及したものとも考えられる。もちろん、青柳喜平が講道館柔道の普及に全く関与していなかったという訳ではない。両者は、渡韓する以前から近懇の仲であり、また内田良平が大韓帝国に設立した講道館柔道の内田道場において内田良平が師範となり、青柳喜平は道場経営・指導の援助をしたとされる。

大韓帝国における講道館柔道の移入は内田良平によるものであるが、それは純粋に柔道を伝えるというよりも、むしろそれは日本による大韓帝国の植民地化の過程で行われたものであると言えよう。その経緯はともあれ、その過程で行われた講道館柔道の普及が現在の大韓民国の柔道の発展に一定の影響を与えたことも一つの歴史的事実である。

# 注及び引用・参考文献

- 1) 大韓帝国とは、現在の大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国が分裂する以前の国の名称である。本研究では、1910年の日本による併合後も朝鮮半島について「大韓帝国」と呼んでいる。そのため、1945年の日本の植民地支配終結までを、大韓帝国の歴史としている。以下、現在の「大韓民国」の名称の変遷を紹介する。1897（明治30）年10月に李朝の国王であった高宗は国号を李氏朝鮮より大韓帝国と改める。1910（明治43）年の日韓併合により大韓帝国は、日本政府により朝鮮と名称を変更され、1945（昭和20）年までこれが続いた。しかし当時大韓帝国にもともと住んでいた人々は、朝鮮という名称を用いずに大韓帝国という名称をそのまま使用していた。そして第二次世界大戦の終戦を迎え1945年（昭和20）年8月より大韓民国となったが、同年9月に大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国に分裂し現在に至っている。（小野勝敏：朝鮮柔道史の研究の序説，岐阜経済大学論集，第26巻第1号，25，1992.）
- 2) 一进会とは、韓国人李容九（イ・ヨング）などが1904（明治37）年に結成した「韓日合邦」を掲げる政治団体で、日本の陸軍がこれを利用しようと支援した。ただし李容九のいう「韓日合邦」は、連邦として大韓帝国と日本を連合国家にすることで、日本の意図していた植民地化は大きく異なっていたことに注目する必要がある。  
[李容九（イ・ヨング）と内田良平]，（<http://hp.Vector.co.jp/authors/VA013417/paco21/qa.htm>）。
- 3) 東学党の乱とは、1894（明治27）年東学党が中心になって起こした農民反乱のことである。李朝時代は後期になって政治の混乱、貪官・汚吏の不道德、税金の過重などで農民ははなはだしい苦痛を受けるようになり、特に外国勢力の浸透で国家の危機が加重される反面、農村の人的階層の変動に伴い農民の社会意識が急速に発展するなど複雑な情勢をなしていた。このような現実のもとで、農民たちの間には漠然としてではあるが、外国の侵略を退けて政府の改革を要求する風潮が芽生えるようになった。新興宗教東学はこのような情勢を背景として急速に発展、単純な宗教的領域を超えて農民の思想的支柱となり、社会改革・外国勢力の排斥を標榜する政治的勢力として忠清・慶尚・全羅道に伝播した。  
[内田良平]，（<http://www.tabiken.com/history/doc/M/M301c100.HTM>）。
- 4) 玄洋社とは、1881（明治14）年から第2次世界大戦敗戦まで続いた国家主義団体である。1876（明治9）年、新政府は士族への攻撃を強め廃力令を出し禄も廃止した。これを不満とした士族は1876（明治9）年10月萩の乱を起こし、翌1877（明治10）年に西南戦争に参加、福岡藩では士族の乱となった。彼らは内乱鎮定後、開墾社・向陽社を結成、征韓論や反政府的思想を説いた。1881（明治14）年頭山満の仲介で団結し、向陽社を玄洋社と改名、初代社長に平岡浩太郎を選び、福岡に本部を置いた。それは、天皇主義・国権主義を中心に、大陸進出を目的とする大アジア主義を提唱した。  
[内田良平]，（<http://hp.Vector.co.jp/authors/VA013417/paco21/qa.htm>）。
- 5) 黒龍会は1900（明治33）、内田良平が日清戦争後の三国干渉に憤激し創設した。他に伊東知也、吉倉汪聖ら大陸浪人多数が加わっている。大アジア主義を標榜し大陸進出、対外強硬を主張、日露戦争、韓国併合、辛亥革命援助などの実際局面では裏面で活躍した。それは、日本の対外政策を側面から支える結果となった。一方、第1次世界大戦末期からの民主主義運動、労農運動、社会主義運動の発展により天皇制と日本帝国主義は動揺すると、国権論の側に著しく傾斜し、反民主主義・反労農運動の立場を明確にしていた。  
[内田良平]，（<http://hp.Vector.co.jp/authors/VA013417/paco21/qa.htm>）。
- 6) 阿部文雄：京城柔道発達史（二），京城日報，第6889号，1927，2月2日。
- 7) 武徳会誌，第9号，105，1910。
- 8) 大韓体育会：大韓体育会史，57，1965。
- 9) 京城新聞，第104号，1908，11月7日。
- 10) 京城日報，第6889号，1927，2月2日。
- 11) 京城新聞，第167号，1930，6月12日。
- 12) 黒龍俱樂部：『国士内田良平伝』原書，43，1967。
- 13) 工藤雷介：秘録日本柔道，東京スポーツ新聞社，74，1972。
- 14) 工藤雷介：秘録日本柔道，東京スポーツ新聞社，77，1972。
- 15) 松本芳三：柔道百年の歴史，講談社，117，1970。
- 16) 松本芳三編：柔道百年の歴史，117，1970，より作成。参加10流派のうち講道館を除く諸流派は，すべて柔術。
- 17) ソウル師大校友会：羅絢成博士回甲記念論文集，144，1976。
- 18) 李濟晃：新柔道，受賞界社，22，1976。
- 19) 李学来：韓国近代体育史研究，知識産業社，101，1990。
- 20) 李瑄根：大韓国史，新太陽社，309，1980。
- 21) 李洪鍾：韓国柔道史，漢江文化社，205，1984。
- 22) 林榮茂：韓国体育史新講，教学研究社，207，1985。
- 23) 申元永：韓国体育百年史，新元文化社，137，1981。
- 24) 鄭三鉉：日帝武断統治期の韓国体育史研究（博士学位論文），120，1990。
- 25) 内田良平研究会編著：『国士内田良平その思想と行動』，展転社，399，2003。